



# ニュースレター

## 第51号

NPO法人 日本リハビリテーション看護学会

事務局案内

住 所 〒162-0825  
東京都新宿区神楽坂4-1-1オザワビル2F  
株式会社ワールドプランニング内  
NPO法人日本リハビリテーション看護学会  
事務センター  
電話番号 03(5206)7431 FAX 03(5206)7757  
E-mail jrna@worldpl.jp



### 理事長挨拶 学会の新たな形をつくる

理事長 栗生田 友子 (埼玉医科大学保健医療学部)

会員の皆様には、昨年度、本学会の事務局移転にご協力いただきましてありがとうございました。事務局移転の情報を発信してから移転までの間、わずかな時間の中で新しい体制に適應していただき、安堵いたしました。実際に、学会発足当時より、30年にわたり、病院で窓口となって会員管理の労を担っていただいていたご担当の皆様には、これまで以上に労をおかけしたと思います。施設単位での学会事務業務は、個人情報管理や、情報伝達の早さの点で時代にそぐわないこともあると思いますが、さらに必要な配慮をしつつ見直してまいりたいと考えております。

令和元年度は、本学会にとって、事務局移転を節目としたいわば「移行」の年となりました。「生きていくことは発展していくこと」と「名将」故野村克也監督が言われておられましたが、学会は意味ある活動を創造しながら、身近な人材の中から「名匠」を育て、リハビリテーション看護の実践的な知の創造と技を發展させていく責務を担っています。リハビリテーション看護に携わる我々が、ともに歩み、ともに学び、ともに歩みだす学会に發展していけるよう、力を尽くしてまいります。名匠の原石は会員の皆様です。

さて、来年は東京でのパラリンピックが開催されます。障害のある人たちがその人らしく暮らせる場が、日本は提供できているのか。この大きなイベントを通してはっきりと見ることができるでしょう。2025年問題も目前にきています。日本がとってきた施策は、確かな準備状態を整備してこられたのか。これについても少しずつ露わになるでしょう。疾患の推移や人口動態などを踏まえた体制整備は、リハビリテーション看護の場では直接はっきりとした映像で見ることになります。本学会が、この時代の流れに即応していくには、ともに学び、ともに歩む学会にも、相応の準備が必要です。これからの創造的な活動は、それらを背景に見据えていく時期を迎えようとしています。リハビリテーションを核におく本学会が、人がよく生きるための医療・福祉の一翼を担う立場で、地域包括ケアシステムに、どう貢献できるかを考えなければならぬでしょう。

人の病みの軌跡 trajectory of illness のそれぞれの状況の中では、リハビリテーションが欠かせません。本学会が今後リハビリテーションの各分野をどこまで包含していくことが必要なのか、転機があるとしたらいつどのようにその時代の流れに対応していくのか。



そのような変化の中に今この学会が対応していく必要があるのだということを感じていくことも必要です。回復期リハビリテーションに広い活動領域をもちながら、がんのリハビリテーション、心臓リハビリテーション、呼吸器リハビリテーション、そして腎臓リハビリテーションの医療チームが総合病院の中で大きな機能を持ち、チーム形成をしてきていますので、いずれは私たちが信条とする人間の尊厳の回復を目指す看護を、発揮していくことが必要になるのだろうと思います。とはいえ、まずは、勇み足をせず、基盤固めをこの新しい体制の中で進めたいと考えます。

本学会は、昨年度、成果物としてあげた「リハビリテーション看護のクリニカルラダー」の実践行動の目安や、現場で努力している活動に基づいた診療報酬改定の基礎調査も、取り組みを進めていますので、どうぞ十分活用していただけるよう期待しております。リハビリテーション看護に関心を寄せる人たちが、「入りたくなる」「学びたくなる」「一緒に活動したい」と思えるような学会を目指して、今年度もまた進めてまいりたいと思います。研修会、学術大会での活発な意見交換ができますことを楽しみに。



## 第31回学術大会・通常総会 開催報告



令和元年11月9日・10日の両日、上智大学四谷キャンパスで日本リハビリテーション看護学会学術大会が、上智大学 総合人間科学部看護学科 石川 ふみよ教授を大会長として開催された。

テーマ『ともにささえ ともに生きる ; 未来のつなぐリハビリテーション看護はこの手にある』を軸に基調講演として 大会長でもある石川先生が「今あらためて、ケアをすることとは」を講演され、ケアすることを改めて考えさせられる講演内容であった。

特別講演、ワークショップ、交流集会Ⅰ～Ⅳ（リハビリテーション看護実践能力ラダー、脳卒中リハビリテーション看護認定看護師交流会等）、シンポジウムなど興味深い内容が組み込まれていました。

また、今回は、2020年東京オリンピックの開催に向けて、パラリンピックに関する教育講演、公開講座が開催されました。参加者は461名 口演29題・示説20題あり、優秀演題も表彰されました。

通常総会も円滑に運営されました。

1日目の夜に懇親会もあり、上智大学の学生さん達が音楽を奏でてもらい、上智大学の上層階から東京の夜景を眺めつつ、親睦を図りました。上智大学の皆さんのおもてなしも心地よく楽しい宴を過ごしました。

兵庫県立リハビリテーション西播磨病院

高濱 正子



## 講演：地域での生活を支える！回復期

### －生活期リハビリテーションにおける看護師の役割と多職種協働－

演者：NTT東日本伊豆病院 湯本 英恵(看護師) 小川 藍里(MSW)

回復期リハビリテーション病棟では、患者の身体・心理・社会的問題を解決するため患者を中心にチームアプローチが実践されており、NTT 東日本伊豆病院から看護師と多職種協働に関する発表が行われた。

他の回復期リハビリテーション病棟を有する医療機関と同様に、同病院においても回復期リハビリテーション病棟でのチームは患者に関連するスタッフで構成されている。そこで実際に協働しているそれぞれの専門職がどのように患者や家族に介入し生活を視ていくのか、その人らしく生活するために必要なことの支援をどのように展開するのかについて看護師と MSW の立場から発表が行われた。

看護師は患者の全身状態を管理しながら生活の再構築に向け、患者・家族の思いに寄り添いより良い意思決定が行われるように支援することや、障害への接し方を理解するための支援を心掛けており、MSW は多職種と協働しながら身体的な状態のみならず患者を取り巻く環境も踏まえてアセスメントし院内外の連携調整を担うことが求められている。それぞれの専門職種が患者・家族の課題を明確にし、解決していくこと、特にどの専門職にも生活を視る視点が必要であること、最後に患者・家族を置き去りにしないということが重要であるとまとめられた。このセッションは各専門職からの発表を聞き、日ごろ自分たちが実践しているチームアプローチの在り方を再確認できるセッションであった。

JCHO 湯布院病院 佐藤 史

## 教育講演：

### 『パラリンピックブレイン；パラアスリートの脳に見る再編成能力』

東京大学大学院総合文化研究科 教授 中澤 公孝

この度、NPO 法人日本リハビリテーション看護学会第 31 回学術大会に参加し、東京大学大学院総合文化研究科の中澤公孝先生による『パラリンピックブレイン-パラアスリートの脳にみる再編能力-』の教育講演を聴講する機会をいただいた。来年に迫った東京 2020 パラリンピックに関連するプログラムで話題性もあり、また、リハビリテーション看護にも関連する内容であり、大変興味深く聴講させていただいた。人間が強いモチベーションとともに身体トレーニングを長期的に継続すると、代償性反応とトレーニング特異的可塑性の相乗効果により脳の再編が見られることを研究にて明らかにされているという話を聞いて、今後、再生医療などの最新医療にも大きく貢献できるものとなるのではないかと感じた。

自施設の患者をみても、アスリート並みの強いモチベーションを持ってリハビリに取り組める人が多いとは言いが、「こうなりたい」と言う患者の思いや目標を早期から明確にし、モチベーションを維持しながらリハビリが継続できるよう、多方面から調整していく事は、身体機能の早期回復とともに社会復帰への第一歩であり、リハ看護の大切な役割ではないかと考えた。また、講演の中で、「障害は失うものばかりではない、障害を持ち得る物もある」と言われた先生の言葉に大変共感を受けた。

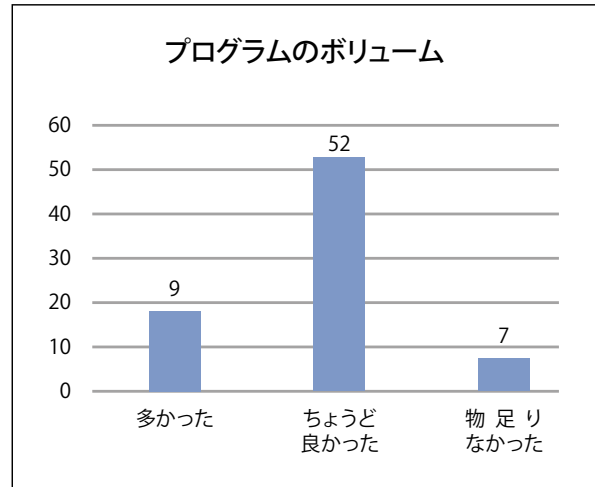
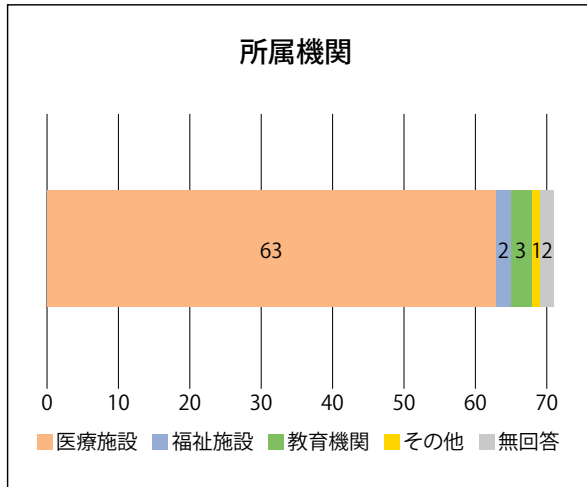
これらの学びを活かし、日々五感を研ぎ澄ませ、患者の強みに着目し、多職種協働しながら患者の目標が達成できるよう今後も努力していきたい。

地方独立行政法人 広島市立病院機構 広島市立リハビリテーション病院 濱中 綾子



# 第31回 学術大会アンケート結果

n=71



## 自由記述 一部抜粋

### 第31回大会についての意見

#### (1) プログラムについて

- ・興味深いプログラムが沢山あり勉強になった。
- ・リハビリテーションに興味を持ち、初めて参加したが、幅広い内容でどれもわかりやすかった。今まで自分が行ってきたことをより深め、リハビリという分野について学びを深めていきたいと思った。
- ・リハビリテーション看護を様々な視点や職種やユーザーさんからの講演を聞くことができ、視野を広めることにつながった。
- ・若手のスタッフにも外を知る良い機会になるため、次年度は参加を促していきたい。

#### (2) 演題発表について

- ・口演、示説会場では多くの症例への取り組みを聞かせていただき、大変参考になった。全国の色々なところで同じように悩み、頑張っているということを感じることができ励みになった。大会として集約することで、情報を得ることができると思う。

#### (3) 学会企画について

- ・リハビリテーション看護のラダーなど学生への教育の指針ともなるといったので、この学びを早速活かしていきたいと思った。

#### (4) 改善を要するという意見

- ・講演や交流集会などの企画は多いが、演題発表が少ない。
- ・実践者の看護師が学びたいと思う講演、交流集会、ワークショップが少ない。
- ・ランチョンセミナーがあれば良かった。
- ・参加費について、1日参加の別の金額設定があったほうが良い。

#### (5) 日本リハビリテーション看護学会への意見

- ・リハビリテーション看護研修会を増やしてほしい。地方でも開催してほしい。各ラダー対象者に向けてもお願いしたい。
- ・次回大会では、テーマをざっくり決めて、いろんな病院の看護師・介護士・リハスタッフ・SWで困っていることを話し合うところがあるといいと思う。



## 日本リハビリテーション看護学会 活動収支決算書

2019年10月1日～2020年9月30日  
 特定非営利活動法人 日本リハビリテーション看護学会  
 (単位:円)

科 目	金 額	小計・合計
<b>【A】 経常収益</b>		
1 受取会費 受取入会費 正会員受取会費	500,000 10,400,000	10,900,000
2 事業収益 調査・研究・学術大会開催事業収益 研究会・講演会開催事業収益	8,005,000 2,000,000	10,005,000
3 その他の収益 受取利息 学会誌売上 雑収入	10,000 30,000 0	40,000
経常収益計		20,945,000
<b>【B】 経常費用</b>		
1 事業費		
(1)人件費		0
(2)調査・研究・学術大会開催運営費 学術大会運営費 学術誌編集・発行費 ニュースレター発行費 研修会費 教育・調査研究費 委員会活動費 1)学会誌編集委員会 2)研修委員会 3)広報委員会 4)会員拡大委員会 5)調査委員会 6)教育プロジェクト	7,900,000 1,700,000 500,000 850,000 500,000 100,000 100,000 100,000 100,000 100,000 100,000	12,050,000
事業費計		12,050,000
2 管理費		
(1)人件費		0
(2)その他の経費 会議費 旅費交通費 印刷・通信費 HP管理費 業務委託費 租税公課 雑費	200,000 1,500,000 1,000,000 735,000 5,360,000 0 100,000	8,895,000
管理費計		8,895,000
経常費用計		20,945,000
当期経常増減額【A】－【B】…①		0
<b>【C】 経常外収益</b>		
経常外収益計		0
<b>【D】 経常外費用</b>		
経常外費用計		0
当期経常外増減額【C】－【D】…②		0
税引前当期正味財産増減額①＋②…③		0
法人税、住民税及び事業税…④		0
前期繰越正味財産額…⑤		6,324,080
次期繰越正味財産額③－④＋⑤		6,324,080

## 日本リハビリテーション看護学会 第32回学術大会のご案内

学会長：学術大会長 板倉 喜子  
 (医療法人白山会 白山リハビリテーション病院 看護部長)

日 時：2020年11月21日・22日 ウイングあいち





## 施設 紹介

### 社会医療法人愛仁会 愛仁会リハビリテーション病院

看護部長 作山 美香



愛仁会リハビリテーション病院は、大阪府の北部に位置する高槻市にあります。高槻市は大阪と京都の中間にあり、15分でどちらにもいけるアクセスの良いところですが、少し足を伸ばすと山や田園など緑が多く、都会の便利さと豊かな自然が共存した街です。病院は駅から5分と市の中心部にありますが、病院の上層階からは遠くに山々が見え、景色の良いところです。

当院は、昭和59年に「理学診療科病院」として発足し、平成11年に現在の病院名に改名し、社会の動向や地域から求められるものに応じながら、長年にわたってリハビリテーション医療を行ってきました。平成12年からは、大阪府地域リハビリテーション地域支援センターとして活動しています。病床数は264床で、回復期リハビリテーション病床が210床で入院料1の施設基準を取得しており、54床が障がい者病床です。“その人らしい生活に”という病院の理念のもと、住み慣れた地域にもどっていただくことを目標にチーム医療を推進しています。職員は、医師18名、看護師・看護助手213名、セラピスト173名、事務や診療技術部職員63名の約470名です。

看護部は、“もてる力をみつける 支える のばす”を理念としており、何らかの障がいもち入院される対象の、残存機能など身体面だけでなく、精神面や社会面も含めて活用できる力は何か、ポジティブに“もてる力”をとらえ、伸ばしていけるような看護を目指しています。そのため、昨年度よりICFの考え方を看護計画にとり入れるよう活動してきました。患者の身体機能・活動・参加の情報から生活機能として捉え、患者や家族が思い描く退院後の生活に近づけるよう、目標思考の看護展開に向けて取り組んでいます。

また、リハビリテーション栄養の重要性が説かれている今、看護師も患者の生活を継続的にみている専門職として栄養状態のアセスメントを行い、セラピストや管理栄養士と情報共有しながら、訓練のできる体に整えていくことを大切にしています。食事摂取量や摂取状況だけでなく、訓練内容や生活内での移動手段の変更による活動量の向上、発熱など身体状況による体力消耗など、患者の状態にあわせてタイムリーに管理栄養士とカンファレンスを行い、適した食事を提供できるような仕組みの定着に向けて活動しています。

2019年度に、病院機能評価、リハビリテーション付加機能評価を受審したことを機会に、さらなるチーム医療の強化が課題であると認識しました。職種間での情報共有はもちろんのこと、多職種がリハビリテーションの本来の意味である患者さまの復権を目指し、真の患者を中心とした医療、看護が行えるようチームで取り組んでいきたいと思っています。

## 編集後記

新型コロナウイルス感染が拡大し、各施設で対応に追われている状況となり、どの時点で終息がくるのか、それにより東京オリンピックにどのような影響を及ぼすのか懸念される所です。集団活動が自粛されている今、ICTで会議やライブ配信などされていますが、診療報酬改定でもICT活用にて会議が認められましたので、今後もこのような形が進んでいくのでしょう。

兵庫県立リハビリテーション西播磨病院 高濱 正子

